

## (2) 循環器科

### 概要、特色

- (a) 小児循環器を専門とする診療科として、主に先天性心疾患を取り扱う。その他、川崎病、心筋疾患（心筋症、心筋炎）などの患者数も多く、急性期および慢性期を通じて継続的な治療を行っている。
- (b) 18歳を超えた先天性心疾患患者の管理を成育医療の重要な要素と捉え、成人の先天性心疾患患者の外来、入院および手術を行っている。
- (c) 胎児診療科と協力し、胎児期のスクリーニングで心疾患が疑われた症例や、他の疾患における心機能の評価などを経時的に計測し、胎児の管理および治療に当たっている。
- (d) 周産期科、母性内科と共同で先天性心疾患患者の母体妊娠の管理、治療に当たっている。
- (e) 特殊診療科、外科、新生児科と共同で胎児治療の検討を行っている。

### 診療活動、研究活動

- (a) 循環器科外来は、木曜日以外の毎日開いている。常時2名の循環器科専門医が診察に当たり、外来患者数は一日20-30名で週に80-120名であった。  
新患者は月に10-15名で、ほとんどが紹介患者であった。紹介患者は、小児の患者だけでなく、18歳以上の成人先天性心疾患の複雑心奇形患者や先天性心疾患の妊娠女性の受診が、計10名であった。また成人先天性心疾患の紹介患者は、心臓の問題のみでなく全身の合併症を伴う症例や、重症例、手術適応例が多く見られた。
- (b) 心電図判読、ホルター心電図、運動負荷試験、レートポテンシャル等の生理検査と、超音波検査の実施件数は以下の通りであった。

平成14年度	2002/3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
心電図 判読例	357	377	358	368	467	420	293	343	282	337
ホルター心電図	14	27	25	19	34	39	20	35	28	41
運動負荷実施例	5	8	4	3	2	3	6	8	2	2
レートポテンシャル	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0
<b>合計</b>										
<b>心臓超音波</b>										
経胸壁	67	94	149	144	191	216	170	208	185	206
胎児	1	7	4	3	1	3	3	5	1	5
<b>胸壁・胎児超音波合計</b>										

<b>平成14年度</b>	2003/1月	2月	3月	項目合計
心電図 判読例	325	324	434	<b>1083</b>
ホルター心電図	26	29	43	<b>380</b>
運動負荷実施例	0	2	4	<b>49</b>
レートポテンシャル	0	0	1	<b>4</b>
<b>合計</b>				<b>1516</b>
心臓超音波				
経胸壁	209	201	226	<b>2266</b>
胎児	3	6	3	<b>45</b>
<b>胸壁・胎児超音波合計</b>				<b>2311</b>

経胸壁超音波検査は、通常の生理検査室で行う以外に NICU、ICU、各病棟で行われた検査である。この他に開胸手術の術前、術後の経食道超音波検査（40 例）を実施した。また、胎児診療科、周産期科と共同して行っている胎児心疾患スクリーニング、心疾患母体の妊娠経過中の超音波検査も、変化を経時的に観察することにより効果を上げた。

- (c) 心臓カテーテル検査は週に平均 3-4 例、平均すると月に 13 例で、そのうちインターベンションカテーテル（弁拡大、血管拡張、血管閉塞等）は月に 2-3 例であった。

月	2002年5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
カテ件数	6	11	12	13	11	16	24	11
インターベンション	0	0	0	0	0	2	2	1

月	2003年1月	2月	3月
カテ件数	11	17	11
インターベンション	2	3	2

開院より 2 ヶ月後の 5 月中旬よりカテーテル検査を開始した。内容としては、半数が心房中隔欠損、心室中隔欠損などの単一心奇形であったが、半数は無脾症候群、多脾症候群のように肺動脈閉鎖、静脈欠損、単心房、単心室などが合併している複雑心奇形であった。NICU および ICU からの緊急カテーテルも多く、臨時カテーテルも 10 例ほど行った。カテーテルインターベンションは、肺動脈弁拡大術、肺動脈狭窄拡大術、動脈管閉鎖術、異常血管のコイルによる閉鎖術、心筋生検などを行った。